94
783

始

94
1783

三重縣技師藤枝俊信君閲
三重縣技手藤原康雄君著

竹林業講話

三重縣技師藤枝俊信君閲
三重縣技手藤原康雄君著

竹林業講話

大正
1.10.28
内交

序

竹林業の前途最有望なるは贅言を要せず然るに一般經營の方法極めて疎放にして收利の完きを得さるは常に吾人の遺憾とする處なり此書は本縣技手藤原康雄氏か曩に官命を奉して調査したる復命書を補正したるものにして紙幅の豊ならさるに反し其說くところ栽培保護其他諸般の項目に

亘りて殆と漏すところなきは斯業の指針として推賞すべきものなるを信す聊卷端に序して當業者の一顧を俟つ

明治四十五年五月

三重縣技師　藤枝俊信

例言

一余は竹林業奬勵上參考資料を得んが爲め、再昨年七月中官命を奉じ京都府奈良縣及岐阜縣へ出張して斯業の調査を爲したが、其復命書は之れを公にし普く當業者に示さんとの目的を以て、調査したる事項に卑見をも加へ、且つ勉めて平易なる談話体とした。而して當時右復命書の一部は伊勢新聞に登載され、又全部印刷して内務部勸業課より各郡市役所町村役場へ頒布されたのである。

一然るに此印刷物は豫想外に世の歡迎する處となつて、官公署學校又は當業者等よりの要求今尚陸續として絶えぬのであるが、印刷部數既に盡き而も經費の關係上之れが增刷を許さぬ爲めに、遺憾ながら凡て之れを拒絶するの已むなき次第であつたが、此頃某氏の需めに應じ前の印刷物を補正して「竹林業講話」と題し、茲に本稿を與ふることゝした。

一曩に余が出張調査したる京都府は云ふまでもなく竹の本場である。余は主として乙訓郡役所、同郡向日町竹林栽培家安田岩吉（府設摸範竹林看守）、同郡新神足村五十棲駿夫及小林同村助役（竹材貿易業者）等の諸氏に就て調査し、奈良縣は專心竹林業に就て研究されつゝある林學士安藤時雄氏を同縣農林學校に訪ふて、其試驗林をも視察し種々所說を聞いた。次に岐阜縣に於ては竹林栽培家として有名なる同縣揖斐郡本郷村坪井伊助翁を訪問して其竹林を視察し、且つ親しく說明を聞いたのである。

一竹の種類は本邦產のもの五十餘種に達して居るが、

本書には其内最も用途廣く且つ利益多き竹林四天王の稱ある苦竹、淡竹、孟宗竹及黑竹の四種を撰んで之れが經營上の要項を述べたので、素より小冊子のことであるから充分盡さゞる点もあるが、幸にして當業者參考の一助ともなれば著者の滿足する處である。

明治四十五年五月

三重縣廳勸業課に於て

著者識

竹林業講話

目次

緒言……一
第一　造林法……一六
一　適地……一六
二　地拵……二〇
三　植栽……二二
第二　手入保護法……二九
一　手入……二九
二　保護……三四
第三　收支……四五
第四　餘錄……六五

竹林業講話

藤原康雄著

緒言

竹は今更云ふまでもなく東洋の特有物産であつて、歐米各國では絶えて見ることは出來ぬ。然も建築用材として將た器具用材として其の用途は甚だ廣く、工藝の進歩に伴ふて益々其の需用增加の趨勢を示して居る。其の筋の調査に據ると、一ヶ年の產額は約七百五拾萬圓にして、內百萬圓は外國への輸出價額である。其の產地の首なるは即ち京都府であつて、毎年の產額は百五拾萬圓乃至百八拾萬圓に達して居る。就中山城八郡が竹の主產地であつて、竹林地面積は府下總計二千三百十五町餘歩の內千

四百八十町餘歩の多きを占めて居る。坪井翁が山城の竹ではない竹の山城であると云はれたのは誠に尤もな次第である。今試みに山城八郡の竹林面積を其の順位に依り、且つ一戸平均面積を掲ぐれば次の通である。

郡名	面積	總戸數に對する平均一戸面積	農家戸數に對する平均一戸面積
乙訓	三五八町七六	九畝二六	一一畝二〇
葛野	二七四、一六	四、二九	九、〇六
宇治	二三三、四六	八、一六	一五、二八
綴喜	一七〇、四六	一、〇五	三、二一
愛宕	一四五、〇七	二、二九	三、二八
久世	一三四、六三	三、一五	五、二四
相樂	一〇一、五〇	一、〇五	一、一三
紀伊	六二、四五	二〇	二、一二
合計平均	一、四八〇、三八	三、〇四	六、二三

隨て京都府下竹材商は京都市に四十戸郡部にも四十戸あつて、京都竹商組合山城竹商組合の二組合を組織して居る。

次に竹の本場中の本場たる乙訓郡に就て少しく記して見やう。乙訓郡は一町十ヶ村より成り、總戸數三千六百七十二總人口二萬三千三百二十九を有して居る。栽培竹種は矢張主として苦竹、淡竹、孟宗竹、黒竹の四種に限られ、其の明治四十一年中の產額は次の如くである。

種別	數量	價格
竹材	一九一、一五七束	一四三、三六七、七五〇圓
筍	八六、七三四〆	六、九三八、七二〇

竹皮　三一、七〇二、〇　七、九二五、五〇〇
竹枝　三二、二四二三尺繩〆　九六七、二六〇
計　一　一五九、一九九、二三〇

同年中の竹材價額一束當りは次の如くである。

苦竹　八拾錢　淡竹　七拾五錢
孟宗竹　五拾錢　黑竹　壹圓

而して產出竹材の約八割は苦竹であるが、其の價額騰貴の摸樣を聞くに、明治十年頃は貳拾五錢位であつたものが、二十七八年頃には六拾錢となり、三十八年には七拾五錢となつた。

乙訓郡に亞いで竹林業の盛んなるは葛野郡であるが、兩郡の臺帳平均地價一反歩當を調べて見ると左の通である。

郡名	樹林	竹林
乙訓	四三〇㍍	九、三一〇㍍
葛野	四八〇	一六、五八〇

竹林業は樹林業に比し事業一層集約であるから、京都府下に於ても個人としては左迄多町歩を經營して居らぬ、最も多面積を所有して居るものも先ず二三十町歩內外である。然しながら竹林の一町歩は其の收支の点に於て、將た勞力を要する樣度に於て、確かに樹林の十町歩に匹敵するのであるから、竹林十町歩を所有して居るものは樹林百町歩を經營して居ると同樣である。

此くの如く竹林業旺盛の爲めには單に竹林所有者の利益を得るばかりでなく、地方勞働者の惠澤を享くることは洵に夥だしい。即ち竹材伐採、筍

掘取、運搬、手入施肥の如きは男勞働者之れに當り、婦女子の仕事は除草、竹皮拾取、竹枝採取等である、又附近都會地には扇子團扇其他竹材を原料とする手工業が發達して、地方産業上多大の貢献をなして居る。翻つて吾三重縣の竹林業を察するに、啻に其の面積に於て少ないばかりでなく、手入肥料などは全く施さぬものが多い、爲めに竹材は段々細く且つ惡質となり、筍の發生も次第に減少するの狀態である。紀州尾鷲の孟宗竹は稍著名であるが、夫れは著大の竹幹を産出すると云ふに過ぎぬので、面積も極めて小畝歩で、寧ろ園藝として見るべきもので林業上の價値は甚だ乏しいと云つてよい。近頃伊賀地方を初め各地に於て自然枯に罹り全滅せる竹林も甚だ少なくないので、本縣竹林業は前途頗る悲觀すべき現況を呈して居る。聞く處に依れば伊賀上野地方で盛んに製造せらるゝ傘原料の大半、及山田旅店料理屋等にて消費せらるゝ食料筍は、殆んど京都府下から輸入を仰いで居るとのことである、而して本縣には現今空しく荊蕀に委し又は粗末なる樹林地中で竹林栽培の好適地に乏しからぬ上に、本邦各地方へは勿論外國へも輸出の便に富んで居るのであるから、大いに竹林業を興し且つ集約に施業することは、地方産業上最も緊要のことと信ぜられる。

明治四十三年五月農商務省山林局長は、神戸竹材同業組合長から提出した、竹材に關する陳情書を各府縣知事へ通牒した。右は參考となるべきものであるから、次に其全文を掲ぐる。

竹材に關する陳情書

輸出竹材は本邦の特産品にして海外市場に於ても他に競爭するものな

く實に國際貿易品中比類なき恰當品にして從來外國の嗜好に投し需用最も多く現在二十有七ヶ國へ輸出するに至り一ヶ年の輸出金額は四拾萬圓に過ぎざるも需用は益々增加し販路は愈擴張しつゝありて更に貿易の消長なく又商況の盛衰なく價格も大なる變動を致さすして數年來推移せるの狀態にして且竹製品即ち籠類、簾、扇子、團扇、日傘、提灯、椅子、机、棚、花臺、其他の器具及裝飾品に製して輸出せしものも亦僅少ならざるべし然るに是れが原料たる竹林は先年來病蟲害の爲め枯死するもの頻繁にして流行性となり各產地にして其害を蒙らざるものは殆んど稀なり依て爾來年々伐採を恣にし數量を減縮し忽ち輸出竹材の供給缺乏を致し就中黑竹の如きは先年一時輸出の不況を現したるに因り伐採をなしたる儘總て栽培をなさゞりしを以て著しく產出少額となりたるにも拘はらす近來需用者多きか爲め愈不足を告くるの急なるを感し甚しく貿易の退却せんことを之れ恐る加之內地に於ける竹材の消費額は確かに五百萬圓以上にして尙ほ人口の增殖と文化の進運に伴ひ建築に裝飾に其他の用途激增しつゝあれは竹材の供給は益不足を告くるに至るは必然たれは洵とに杞憂に堪へざるなり若し之を現在の儘にして放任せば遂に竹材に因て得る所の國益を損失するの憾なき能はす切に竹林の增殖を希望して己まざる所以なり抑も造林事業は我邦の國是として一日も忽諸に付すべからざるは論を待たす既に政府及各地方廳に在ては汲々として其增殖を圖りつゝあるも一二地方を除く外は未だ竹の造林に及ふものあるを聞かず豈に遺憾の至りならずや故に此際竹材を產出する各地方廳に於ては之か保護奬勵の方法を設けられて竹林の

繁殖を計り材料の供給を潤澤ならしめ内外の需用を充たし貿易を益發展せしめ國益を增進するに勉められんことを希ひ別紙竹材に關する大要を掲け意見書を提出致候間右關係各府縣へ宜しく御訓示ありて竹林增殖の實を擧け候樣御取計被成下度此段懇請の至りに堪へす本組合總會の決議に依り茲に謹んて陳情仕候也

明治四十三年四月十一日

神戸竹材同業組合　組長　長田大介

農商務大臣小松原英太郎殿

竹材に關する大要意見書

夫れ竹の植付は平坦地と山間地とを選ばす何れの地にも生育することを得て繁殖するものなれば之れか營林及管理に要する費用も他の樹木に比すれは少額にて足れりとす又樹木は凡そ十ケ年を經ざれは用材とならざるも竹は然らす僅々二三ケ年を過れば伐採し得るの利益あるものなり實に興國的植物にして人世缺くべからざる必要品たり現に米國に於ては「テキサス州カルフォルニヤ州」に東洋の竹類を移植し之れを繁殖しつゝあるは竹の必要の廣大なると利益の夥多なるを徵証するに足る然るに我國に於ける竹林現在の狀態を顧るに其種類は約五十有餘種あるも内外の需用に適するものを擧くれは苦竹、淡竹、黑竹、孟宗竹の類を最もとす而して竹は禾本科植物なるか故に病蟲害を生し易きを以て其害を蒙り枯死するもの傳播して一種の流行性となり近來之れに依て損失を受くるもの續々相尋き其害頗る多し爲めに現今輸出竹材の如きは忽ち之れか影響を及ほし供給不足となり輸出は年々販路を擴張

し現在二十有七ヶ國に至りたるも猶全世界に及ばんとするの現象を示し内地に於けるも人口の増加と文化の進運とに伴ひ需用の途を多からしめんとするに垂んたり抑々我國の竹林より得る一ヶ年の收穫を概算すれは竹材六百萬圓籜壹百萬圓筍五拾萬圓合計約七百五拾萬圓とす之れか作付反別は統計の依るべきものなければ知ること能はざるも一反歩に對する收益を掲くれは地味栽培の適否に依り差異を生するも凡ろ上は五拾圓中は參拾圓下は拾圓位にして普通拾圓内外と見積りせば大なる誤りなかるべし此外に籜は平均十二貫目若くは十五貫目筍は三十貫目乃至六十貫目を得るものとす之れを種類に依り細別せば左表の如くにして一見其利益を知るに足るへし

種別	收入	支出	利益	概價
苦竹	拾五圓乃至廿五圓	五圓乃至八圓	拾圓乃至拾七圓	一束六七錢
淡竹	拾貳圓乃至拾五圓	四圓乃至五圓	八圓乃至拾圓	同四五拾錢
黑竹	參拾圓乃至五拾圓	五圓乃至拾圓	貳拾圓乃至四拾圓	同壹圓五六拾錢
孟宗竹	拾五圓乃至拾八圓	八圓乃至拾圓	七圓乃至八圓	同參四拾錢
同筍	四拾圓乃至五拾圓	卅五圓乃至四拾圓	五圓乃至拾圓	一貫目平均拾貳錢

又竹林と櫟林とを比較せは一ヶ年度竹は拾參圓餘の收益あるも櫟は參圓餘とすれは他の樹木の造林よりも寧ろ竹林を營造するの簡易にして且利益ある道理なれは遙かに優れりとす現今其竹材か年々減少しつゝあるは實に國家の福利を損するものにして甚た遺憾の極みなり試に其減少を事實に徵し三府四十二縣の調査に係る明治三十六年と三十七年

との統計を示せは左表の如くにして三十七年度は三十六年度に比すれは伐採數量百〇九萬七千八百八十一束價格 貳拾六萬六千百八拾六圓を減せり三十八年以後は年々枯死するもの頻繁にして其損害最も多く現在輸出竹材の供給不足となりたれは三十七年より猶數倍の減少なるは疑ふべからすと雖も如何せん統計の依るに足るへきものなけれは甚遺憾とす

竹林種別	三十六年	三十七年	對比增減
國有林	九、八二三円	五、四七八円	減四、三五四円
御料林	九一一	一、四七七	增 五六六
部分林	二二	一〇三	增 八一
民有林	一、七八三、六五四	一、五二一、一六六	減二六二、四八八
計	一、七九四、四一〇	一、五二八、二二四	減二六六、一八六

伐採總額 五、八一六、二八二束 四、七一八、四〇一束 減一、〇九七、八八一束

又現在輸出竹材を產出する地方は左の如し其の他の府縣に於ける竹材を產せさるは之れなきも只運搬の不便なるか爲め收支相償わすとす

京都府　大阪府　和歌山縣　奈良縣　高知縣
香川縣　德島縣　愛媛縣　山口縣　福岡縣
大分縣　宮崎縣　鹿嶋縣　長崎縣　熊本縣
廣島縣　兵庫縣　滋賀縣　岐阜縣　愛知縣

而して從來竹材の大部分は天然竹材に依りしが竹は自然的繁殖植物と雖も半培養植物なるへけれは將來は栽培法に依りて其繁殖を計り材料を富饒ならしめさるべからす之を保護奬勵して增殖せしめんことを渴

望して措く能はず依て竹林培養の奬勵と被害救濟との方法を講究する
の最大緊要にして急務なるを感し茲に竹材に關する大要を掲け意見を
陳述する所以なり

第一　造林法

一　適地

竹林は樹林に比すれば土地の性質に關する要求比較的少ない、換言すれば竹林業は如何なる土地にても之れを營むことが出來る。是れ竹林と雖も土地の適否を論ずるの必要はあるが、樹林業と相違して經營上土質の改良を行ふことも出來、又施肥の便宜もあるからである。而して如何なる土質が最も竹林に適するかと云へば、所謂砂質壤土がよい。但し孟宗竹は粘土質が多くとも敢て不可はない、殊に筍を目的とする場合には赤

土と稱するものが最もよい。黑竹に至ては其の需用が概して細幹のものであるから、寧ろ瘠地がよいのである。

土質の改良方法としては粘土質の土地へは藁、草又は砂土を入れ、礫質の土地なれは粘土を散布して砂礫の間を塡充すればよい。又地層も餘り深くなくともよい、五寸以上の深さならば優に竹林を仕立つることが出來る、但し置土をすると云ふことは最も必要である。次に土地の乾濕と云ふことには充分に注意を要するので、適潤地が好適地であることは云ふまでもないが、水氣の多い處では鞭根が腐敗するから、可成濕潤に過ぐる土地は之れを避けねばならぬ。京都府下に於ても、平坦なる濕潤地に竹林を仕立てゝ居るものも少なくないが、此かる土地には必ず其の境界線か又は區域内に、巾二尺内外深二三尺の排水溝を穿ちて滯水を防い

で居る。

地勢は種々なる關係上平坦地よりも少しく傾斜ある方がよい、而して其の方向は南又は東に面したる溫い處がよい。又竹林は風害に罹り易いから可成防風林を設けたがよい、殊に樹林地を使用する場合には必ず防風樹を伐殘すことを忘れてはならぬ、其防風樹は成るべく常綠樹で深根性のものがよい。

竹材は土地の如何に依て太くもなり細くもなると共に、培養の方法に於ても或程度まで之れを左右することが出來る。勿論筍とても同樣である。夫故竹林地の撰定に當つては、先以て太い竹竿を目的とするか、或は細幹を欲するか、又筍を目的とすれば直に市場へ賣出すのであるか、若は鑵詰用に供するのであるか、是等の用途を決定せねばならぬ。即ち他に

種々なる關係もあるか、概して肥沃地には太い竹材を生じ瘠惡地には細幹を生ずるのである。

次に土地の性質とは關係がないが、此際一言を要するのは竹林の位置である。凡て森林の產物は其の價格が低廉であつて運據力が甚だ弱小であるから、運輸の便否が森林の收穫に影響を及ぼすことは誠に夥しい。竹林の產物は主として竹材と筍であるが、筍の場合は暫く措き、竹材は木材の如く容積は大ならぬも長さは木材よりも長いから、其の運搬は木材と等しく困難である。京都府下に於ても之れを瀘車積とすることは頗る稀で、近距離には荷車を用ひ、大阪地方へ輸送するには桂川淀川等の水運に據ることになつて居る。夫故新に竹材を目的とする竹林を仕立つるには、此の運搬の便否に多大の注意を拂つて、可成水運の便ある位置を

撰むことが肝要である。筍を目的とする場合は云ふまでもなく都會地に近く、或は輸送の便多きほど其の利益も多い。但し罐詰用に供するのは少々不便の地をも厭はぬ、現に本縣に於ても、名賀郡矢持村大字霧生は上野驛から約七里を距たり、僅かに荷車を通ずるのみで更に水運の據るべきものはないが、孟宗筍の罐詰を製造して東京へ輸出し、年々少なからぬ利益を收めつゝあるの實例がある。

二　地拵

竹林の地拵は、樹林とは別樣の取扱を要するのである。樹林を仕立つる場合には地上に存在する木竹雜草荊蕀等を取除き、植栽並に下刈に差支なき樣にすれば夫れで充分であるが、竹林では其の上に更に開墾を行はねばならぬ。即ち林地を滿面に打起すのであつて、其の深さは京都府地方では普通一尺五寸乃至二尺とする、但し經費の關係上夫れより淺くすることもある。現に京都府設摸範竹林は五寸の深さに開墾されて居る、其の利害は云ふまでもなく淺いのは惡い。又竹林は樹林と異り植栽したものを養成するのでなく、母竹として利用するのであるから、樹林に比しては著しく疎植する。故に一時に費用の支出を避くる爲めに新植の當年は植栽の局部のみ開墾し、翌年又は翌々年に亘つて其の殘部の開墾を行ふ方法もあるが、鞭根が何れの方向に蔓延するか之を豫知することは殆んと不可能であるから、此の方法は繁殖上決して良方法でないことは言を俟たぬ。

樹林地を竹林となす場合には其の前年に於て立木を伐採し、樹根を腐朽せしめて置けば幾分開墾の勞費を減ずることゝなる、但し前々年以前か

ら伐採を行はゞ、跡地に雜草が繁茂する爲めに却つて不得策である。肥料は後に遞ぶるが如く、植栽の時に第一回を施こすのであるが、甚だしく瘠惡の土地であれば開墾と同時に、之れに廐肥堆肥等を施こしたがよい、又土質の改良も開墾のときに多く之れを行ふのである。

三　植栽

植栽の方法にも種々あるが、現今多く行はれて居るのは、母竹植付法である。亞いでは根株植付法であつて、其の外地下莖埋付法、播種法、挿植法などの方法もあるが、成績不良の爲めに餘り行はれて居らぬ。

母竹の撰擇は、樹苗の撰擇とは全く反對の場合が多い。即ち其の幹は可成細小のものがよい、苦竹淡竹であれば徑五六分位が適當である、黑竹なれば尙細小のものを良とする。然るに細小の母竹を得難いのは孟宗竹であつて、京都府設摸範竹林に於ても孟宗竹に限り止むなく太い母竹を植栽したが、果して活着繁殖共に其の成績は不良である。次に母竹には可成長く地下莖を附する程繁殖が早く且つ活着し易いのであるが、實際掘取に當つて長く地下莖を附すると云ふことは勞費の關係上容易の業でない、先づ其の長さは一尺乃至一尺五寸位附するのが通常である。母竹掘取には鋭利なる器具を用ひて、地下莖並に竹根を損傷せぬことに注意を要する、殊に地下莖の芽（俗に鞭芽と竹芽とに區別して居るが一寸見分けは付かぬ）を損傷せぬことにせぬと、繁殖上に至大の影響を及ぼすことゝなる。又地下莖の最初の方向は多くの場合枝の方向と一致して居るから、其積りで掘り取るが良い。

母竹は必ず新竹に限るのである。卽ち秋季植栽する場合は其の年に發生

した竹を撰び、筍發生前に植栽する場合には前年に生じたる竹を用ゆる、而して竹幹は下枝四五本を殘して其の他を伐り去るのである。筍發生前に植栽する場合は竹幹を根株から伐去り、根株に充分土を付けて植込むこともある、是が即ち根株植付法であつて、坪井翁は如何なる時季に於ても、根株植付法は母竹植付法に勝つて居るとの説を唱へられて、現今京都府設模範竹林では其の比較試驗中であるが、未だ充分に試驗の結果は分つて居らぬ。

次に母竹撰擇上最も注意を要することは、母竹林の系統を調査することである。即ち竹林に於ける最も恐るべき病害たる自然枯の關係である。(自然枯の原因及其の豫防法等は今日未だ充分に分つて居らぬ)竹林は凡そ六七十年目には此の自然枯に罹つて全林多くは全滅し、之れが恢復には爾後少なくも十餘年の歳月を要するを普通とするが故に、母竹を撰擇するには自然枯に罹り恢復したときの竹林より之れを需むることが緊要である。若しも此の反對に自然枯に罹るべき年度に近ついたる竹林より母竹を需めた場合には、造林後間もなく全滅の不幸を見るの惡結果を來し、莫大の損失を釀すことゝなる。流石の坪井翁すらも曾々此の調査周到ならざりし爲めか、數年前に成林したる翁か庭後の黑竹林は、現に自然枯に罹つて殆んど全滅に近づいて居るのを余は實見したのであつた。右の外母竹の撰擇には强壯なる地下莖を撰むこと、病虫害のないものを撰むこと等の注意を要する。

母竹の根部を乾燥せしめぬと云ふことの大切なるは云ふまでもないが、可成は根部に少しく土の附着したものを植栽するのが最もよい。但し遠

方に運搬する場合には、運送費の關係上到底望み得べからざることであるから、此の場合には根部を莚包として幹と根部と動かぬ樣に荷造するがよい、尙夫れでも乾燥の虞あらば、根部に米糠の水に浸したものを詰めて箱入とすれば安全である。京都府乙訓郡に於ても此の荷造法に依て、近頃米國と朝鮮とに母竹を送つて可なりの成績を收たとのことである、但し母竹運搬の際は前述の如く梢頭を伐り去つて發送することは言を俟たぬ。

竹の移植季節は往古から陰曆の五月十三日を竹醉日と稱へ、最も適切の時季と稱して居る。然しながら竹は、極寒極暑の季節を除いたら何時にても移植することが出來る。坪井翁は孟宗竹なれば三月中、淡竹、黑竹は四月中、苦竹は五月中と云ふが如く、筍の發生前が適當であるとの說を唱へられて現に實行されて居る。是は鞭根が腐らぬ內に新竿を發するゝ爲めで、前に述べた植栽方法の關係から此の時季を撰まれたものと思はれる。而して京都府地方では竹の種類如何を問はず、一般に九月中旬から十月下旬までに移植することになつて居る、又稀には三月中にも移植する。

植栽本數は多い程早く繁殖して密林となることの早いは云ふまでもない、然しながら造林費節約の爲には、若干年間繁殖緩慢なりとも疎植するの外はない。普通一反歩に孟宗竹は二十本乃至四十本、苦竹淡竹は五十本乃至百本、黑竹は百本乃至二百本が適度である。但し右孟宗竹の本數は筍を目的とする場合で、竹材を目的とすれば苦竹淡竹と同樣である。茲に一言を要するのは孟宗竹林の目的であつて、筍又は竹材の一方に偏せ

す、二樣の目的に依て經營せば事業が安全であつて石川縣地方では專ら行はれて居る。此場合に於ける植栽本數は相折衷したものでよからふ。而して植込位置は、其の距離さへ一定せば方形、三角形どちらでもよい。

植込法は所謂水植法に據るのである。穴は母竹に應じて可成深く且つ廣く堀り、能く土を柔げて母竹を挿入れ、細土を六七分入れたときに水を注ぎ泥土となし、更に細土を振り掛けて堅く踏み付け、風倒れのなき樣支柱三本を用ひて周圍から支へ置くのである。深さは元竹林にあつたときと等しき深さでよいが、風害の虞ある處では少し〳〵深植としたがよい、然し餘り深植は宜しくない。苦竹淡竹孟宗竹は三寸内外、黑竹は一二寸でよい、又濕地では最も深植を忌むのである。

植栽の際に、併せて施肥することが必要である。夫れは鞭根より一尺五寸乃至二尺位距てゝ、竹幹の周圍五ヶ所位に廐肥、堆肥、人糞尿、油槽の如きものを與へるのである。其の量は適宜であるが、人糞尿は二三倍に薄くし、油槽は一本に一二合位可成人糞尿に加用したがよい。而して植込が終れば表土に藁又は刈草を敷いて根の乾燥を防ぎ、又植栽後乾燥するときは時々給水を怠つてはならぬ。

此くの如くにして植栽後最初に發生した筍の大きいのは好ましからぬのであつて、細小なるもの叢生せば最も能く繁殖するのである。

第二　手入保護法

一　手入

總括して手入と云ふも、其の内には種々なる仕事がある。主なるものは施肥、除草、土入及筍を目的とする孟宗竹林の梢頭伐除等である。

肥料の種類は普通廐肥、堆肥、人糞尿、油槽等を使用するが、燐酸質肥料も有効である。京都府地方では土地の乾燥と雜草の發生を防ぎ、且つ土地を柔軟ならしむる爲め多量の藁、刈草、籾殼の類を用ゆる。而して竹林に禁物であるのは鹽分を含んだもので、海草類などは極めて惡い。地方に依ては庭内の竹林に能く鹽分の多い勝手元の廢物を與へる處があるが、あれは間違である。

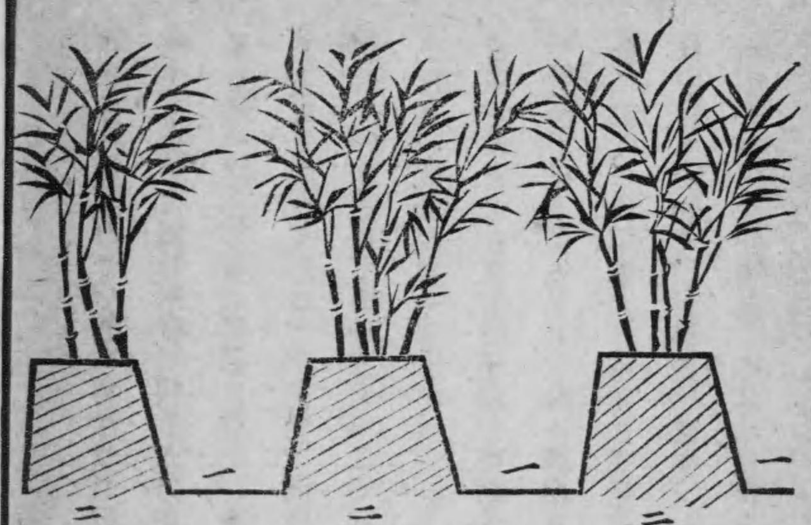
肥料を最も多く要するのは、筍を目的とする孟宗竹林である。凡て多量の肥料を施こした竹林は、繁殖力は盛んであるが竹幹が軟弱なるを免れぬ。京都府地方の特色として、竹林には必ず肥料溜の設備があつて、隨分多量の施肥をなして居る。人糞尿ならば之れを二三倍の水に稀釋したものを一反歩三百五十貫乃至千貫、尙ほ成績不良の所には、油槽又稀には豆糟を加用する、而して新植の年には二回、爾後毎年一回宛施肥するのが通常である。其の時季は九月より十二月頃までゞ、竹幹の空地の表土を掻分けて施こすのであるが、又筍を堀取つた跡穴へも施肥する。廐肥堆肥は之れを一面に撒布して置く。

敷藁、敷草等は施肥を終つて後一面に敷くので、其の量は一反歩藁二三百束、刈草六七百貫目である。而して敷藁、敷草は新植後二三年乃至四五年間は年々之れを施こし、爾後林地の疎密瘠肥の狀況に應じて時々之れを施こす。土入は敷藁又は敷草を終つて後赤土を一面に撒布するので、多く十一月頃から十二月頃に施行する。其の量は厚さ一寸内外で、一反歩約八百荷一荷十八貫として千四百四十貫となる。是れは筍を軟白ならしむる爲めであるが、又其の表面を平滑にし地下に發生する筍の有無を

見別くるに便する。而して筍を目的とする孟宗竹林では毎年土入を行ひ、他の竹林では三年乃至十年毎に之を施こすのである。土入は竹林培養上極めて有効なる方法に相違ないが多量の土壌を要するから、林地隣近土壌の有無及勞費の關係上實行の出來ぬ場合が少なくない。京都府乙訓郡に於ても、向日町の孟宗竹林は山岳地が多く傾斜地の土壌を以て盛土をするの便があるが、隣村の新神足村に至ると竹林は殆んど平坦地であつて、土壌不足の爲めに止むなく土入を行はぬものが多い。

除草は毎年夏季一回乃至二回之れを行ふ。又俗に走り根と稱へて鞭根の根先きが地上に匍出たものは、之れを土中に埋め込むことが必要である。筍を目的とする孟宗竹林では、筍の枝籜の離れる時季に、下枝三四を殘して梢頭を伐り去るのである。夫れは鞭根の蔓延を促がし、根株の動かぬ爲めに行ふので、其の方法は竹幹を手でゆり動かしても折れるが、夫れよりも竿に鎌を附げて伐つた方がよい、而して京都府地方では下枝を多く殘せば細き筍が多數に生じ、少く殘せば太きもの、少數に發生するとの說を唱へて居る。又苦竹、淡竹、黑竹にしても、新植の翌年に發生したものは概して矮小であつて價値が乏しいから、等しく梢頭を伐り去つた方が繁殖が早い。

舊根が多數に交叉し、土地が硬結すれば自然筍の發生が少なくなり、且つ竹幹が細くなるから、時々舊根を堀取ると云ふことも必要である。場合に依りては、寧ろ、隔年に帶狀に堀起して改良したがよい。其の方法は圖に示す如く、竹林の一端から一直線に凡ろ幅一間半乃至二間の處を初年先づ(一)を開掘して其の長根を殘し、不良なものは悉く之れを除い



て更に木葉、塵埃、堆肥等を施し翌年此位置に良根を蔓延せしめ、而して翌年(二)の部を開掘して亦斯くの如くするときは、二ヶ年にして改良することが出來る。

二　保護

竹林も種々の損害を被ることがある。以下類を分つて之れか保護法を概説しやう。

一　人類の害に對する保護

竹林の境界を明にし產物の竊盜を防ぎ、併せて獸類の侵入を防ぐが爲めに、

周圍に藩籬を設くるの必要がある。夫れには四五尺の高さに棒杭を打込んで、三四本の竹を横たへ竹枝の類を挿込むもよく、又二三尺の高さに土堤を設け其の上に枳殼を植うるもよい。俗に萬年垣と稱へて周圍の竹を其の儘折り曲げて垣としたのは、往々病虫害の媒介となることがあるから良法ではない。

竹材は其の伐採量及伐採順序を定め、七年以上の古竹を殘さぬよふ、且つ三年以下の若竹を伐採せぬよふにしたがよい。利用上最も良質のものは四五年生である、但し黑竹は密度及輸出向の關係上、多くは二年生で伐採する。伐採時季は必ず秋の土用後冬季間でなければならぬ、又伐採器具は普通鉈又は鋸を用ゆるが、其の伐株は更に鉈で割つて、早く腐朽せしむることにしたがよい。

此際筍堀取の注意を概説しやう。苦竹淡竹林の筍は、地上に發生したものも間伐的に採取するので、深く地下から堀ることはないが、孟宗竹林では凡て地下から堀取るのであるから、餘程注意を要する、若し其の方法を誤らば、筍又は地下莖を損傷することゝなる。京都府地方では筍堀取鍬として、特種の器具がある、夫れは圖の如きもので、堀取の方法は、日中林内に至り兼て平滑にしてある表土を熟視すれは、地下に筍の發生せる個所は細小なる龜裂を生じ且つ濕つて居るから、之れに目標の爲め笹葉を立て置き、順次堀取るのであつて、堀取に當つては先づ表土少許を去り、筍の上部を熟視すると必ず一方に傾いて居るものであるから、其の傾ける内側に身を置いて、堀取鍬を挿入して地下に於ける地下莖と筍との附着せる工合を突き試み、愈附着部の判然したときに力を加へて、

筍の根部を切斷しこじ上げるのである。

右の外落葉は肥料となるから嚴に其の採取を禁じ、又火災を生ぜぬこと

に厚く注意せねばならぬ。

一　氣象上の害に對する保護

氣象上の被害は、主として雪害と風害とである。雪害は本縣にては概して降雪が少ないから、積雪の際注意して拂ひ落すことにせば充分に保護し得られる。降雪の多い地方では、石川、新潟縣地方に行はるゝ藪卷法に據るの外はない。其の方法は、冬季降雪前に約一畝歩づゝに區分して中心を定め、周圍から四五尺の高さより繩を上方に卷上げて、圓錐形狀として置くのである。

風害に對する保護としては前に述べた如く、暴風の來る方向外緣に防風樹を植ゑる外、他に妙策はない。

一　動植物の害に對する保護

植物の害は主として雜草の發生した場合に起るのであるが、夫れは除草に依つて保護するのである。動物の害は野猪が林内を荒らし、兎が筍の頂點を嚙る等であるが、是れも周圍の垣根を完全にし、尙捕殺して驅除するの方法に據つたがよい。稀に鳥類の害を被り梢を損傷せしむることもあるが、威銃に依りて保護することが出來る。概して鳥類は害虫を食し其の糞は肥料となるから、竹林には寧ろ有益である。次に恐るべきは虫害であつて、種類は多數あるも、就中恐るべきは夜盜虫の被害である。俗に稱へる筍のトマリは此の夜盜虫の害で、幼虫が地下にある際既に侵入して筍の生育するに連れ、漸次上部に至り遂に竹とならずに凋落して仕舞ふものが多い。此の害を被つた筍は、頂點が赤褐色に變つて居るから、容易に之れを見分くることが出來る、又上部又は側面からも侵入す

ることがある、而して此の虫は黒竹及淡竹に最も被害が多い。驅除法は被害の筍は速に之れを採取し、又幼虫を採して之を捕殺し、誘蛾燈を用ひて夜間其の蛾を誘殺する等である。黒竹材で此の被害あるものは、最早輸出用とはならぬ、被害の局部以下、所謂虫下三尺以上あつて、徑五分乃至七分のものは内地用の傘柄に供せられるが、其の他は全く無價値となる。

一　病害に對する保護

竹林は種々なる病害を被ることがある其の内、節自然枯病は一種の病菌が竹の節部に寄生し、其の營養を吸收して黒色に變ぜしめ竹幹を脆くする。葉自然枯病は未だ病源は分つて居らぬか、二月乃至四月頃に梢の葉を枯らし、竹幹の色褪め、節間に水を貯へ衰弱せしめ、甚だしきは枯死する。蔓自然枯病は苦竹林に多く發生し林縁の部分に多く、枝葉が細小なる蔓狀となつて普通の葉と變り、竹林の荒廢を來す恐るべき病である。本病は天狗巣病又は雀巣病とも稱へられ、寄生菌の作用であつて、傳染性を有して居る、本縣に於ても近來至る處之れを散見するのである。煤自然枯病は、病菌が竹幹に寄生して黒色の斑點を生ずる。次に自然枯病は前にも一寸述べた如く、竹林病害中最も恐ろしきもので、世間で竹の開花と云ふて居るのが夫れであつて、縣下にも目下被害個所が少なくない。此の病害の原因は更らに分らぬので、肥料の欠乏に基くと云ふ説を唱へるものもあるが夫れは謬見である。安藤林學士は生理作用に起因するのであらふとの説である、其の被害は極めて猛烈で、青葉は全く脱落し、房狀の穗が澤山付いて花を開き、全林枯死する場合が多い。而して

是等の保護法は、病菌に因るものは其の局部にボルドー液又は油を注げば幾分の効がある。蔓自然枯病に罹つたときは老竹を早く伐採し、被害竹の枝打を行ひ、蔓狀の枝は集めて燒却するがよひ。自然枯病に對しては別に保護の方法はないのであつて、凡そ六七十年目位には此の病害を被むる、本病に罹つた竹林は、寧ろ早く皆伐して後に、相當の手入を施こすのが得策であらふ。全滅後の恢復には十年以上二十年内外を要するが、手入を充分にし施肥を怠らねば、恢復期を早めることが出來るのである。

明治四十三年七月三重縣知事は、竹林病害に付一片の諭告を發せられた。次に其の全文を掲ぐる。

三重縣諭告第一號

竹は百般の工藝上廣く用途を有し内國の需用追年增進するのみならず海外輸出の額亦漸次多きを加ふ故に之か栽培は最も有利なる生産事業の一なりとす然るに近來縣下到る處竹林の病害、開花等の爲枯槁するもの頗る多く甚しきは一團林全滅の慘狀を呈せるものあり之に對し多少注意する者なきにあらざるも多くは等閑に付して顧みす爲に傳染性蔓自然枯（ツルジチンコ）の如き益々害毒の蔓延を致さんとす今にして能く適當の方法を講し之か防除に盡すにあらされは其の損害計るへからす斯業の前途洵に寒心に堪へさるなり而して竹林枯槁の主たる原因及之か防除の方法は概ね左の如し當業者宜しく之に依りて一致共同其の保護に力ひべし

一蔓自然枯（ツルジチンコ）　は苦竹（マダケ）及淡竹（ハチク）林に多く寄生菌の作用に依り傳染するもの

にして其の害況初めは林縁の老竹又は羸弱の竹を侵し漸次波及して内部の壯竹に及ぼすものなり此の害に罹りたる竹は其の枝葉細小なる蔓狀に變し普通の葉は脫落して終に枯死するに至る而して本病の蔓延甚しきときは全く筍の發生を見さるに至るへし之か防除法は生竹を撓めて生垣となすことを避け又林緣の老竹及羸竹を伐採して傳染の媒介物を除き既に病害に罹りたるものにして蔓枝の數全枝の三分の一以ドなるときは其の枝を伐り取り三分の一以上なるときは其の竹幹を伐採して蔓枝全部を燒却すべし

一自然枯（シチンコ）は普通に竹の開花と稱するものにして淡竹林に多く其の原因は詳ならされとも害況は秋季葉に赤色を呈し初冬に至り枝頭に少しく開花し寒中は一時中止するも翌春には青葉全く脫落して小枝に多數房狀の穗を生し盛んに開花す發筍殆んと皆無にして全林枯死するを常とす此の害は傳染性を有せさるもの丶如く之か防除には適當なる方法なきも被害の初期即ち未た甚しく材質を損せさる內に於て全林を伐採利用し其の跡地には除草施肥等を爲し新竹の繁殖を助くべし而して伐採後に發生したる細少なる新竹は再ひ開花して枯槁するものなれとも翌春に至れは更に新竹を生して漸次恢復に向ふものなり恢復期間は普通十年乃至二十年を要すれとも手入保護宜しきを得れは數年間にして開花前に等しき竹林を見るに至るべし

第三　收支

竹林業は樹林業に比し、事業一層集約なると共に、其の利益も多い。京都府下に於ける年々一反歩の收支平均額は、左の通りである。

	收入	支出	純益
苦竹	一八円五〇	五円八〇	一二円七〇
淡竹	一三、二〇	四、二〇	九、〇〇
孟宗竹	一五、一〇	八、〇〇	七、一〇

但し右は竹材のみの收入であつて、副產物たる篠竹枝等の收入は包含して居らぬ。其の栽培巧妙なるものは、貳拾圓内外の純益を收めて居る。

黑竹林に對しては、收支平均額の調査したものはないが、此數年間の純益は、少なくも平均四五拾圓に上つて居るであらふ。

參考の爲め安藤林學士の調査に係る、京都府下孟宗竹林一反歩の收支計算を左に掲ぐる。

初年目支出　二七円五〇〇

内譯			
、二〇〇	公租		
一〇、〇〇〇	開墾整地男二十人		
四、〇〇〇	母竹二十本		
五、〇〇〇	堀取植付男十人		
六、〇〇〇	肥料五駄		
、八〇〇	支柱四十本		
一、五〇〇	繩其の他雜費		
二年目支出	二〇、〇〇〇	諸入費	
三年目支出	二三、〇〇〇	同	
同　年收入	三、九〇〇	筍三十貫	

四年目支出　二五、〇〇〇　諸入費
同　年收入　一六、九〇〇　筍百三十貫
五年目支出　二五、〇〇〇　諸入費
同　年收入　二六、〇〇〇　筍二百貫
六年目支出　三〇、〇〇〇　諸入費
同　年收入　三九、〇〇〇　筍三百貫
七年目支出　三七、七五〇

内　譯
二、五〇〇　公租
一二、〇〇〇　肥料十駄
一、〇〇〇　施肥男二人

一〇、〇〇〇　下草四百束
、七五〇　草敷男一人半
三、五〇〇　土入男七人
一、〇〇〇　除草男二人
一、〇〇〇　器具損料
五、〇〇〇　筍堀取男十人
一、〇〇〇　雜費
同年收入　五三、八〇〇

内　譯
五二、〇〇〇　筍四百貫
一、五〇〇　古竹一駄半

一〇〇　　籜二貫
二〇〇　　竹枝四束

同年純益　　一六、〇五〇

（十三四年頃迄は毎年五六百貫の筍收穫あり、十五六年頃より減少す、而して新植後三四年目迄は收支償はざるも、七年目位より差引拾六圓以上の純益あり）

竹材相場は緒言に之れを述べたが、京都府地方では四束（一束十貫）を以て一駄とし、之れを單位として價格を唱へるのが普通である。一束の標準本數は左の通。

二寸	六十本
三寸	三十本
四寸	十六本
五寸	十本
六寸	六本
七寸	四本
八寸	三本
九寸	二本
一尺	一本半
一尺一寸	一本

右何寸と云ふは竹幹の目通周圍に據るのである。輸出用黒竹は、最下部から三節四節の間を、小さい輪尺を用ひて直徑を測り價格を定める。其の標準單位及近頃の相場は左の如くである。

直徑	一本相場
四分下	四厘
五分下	七厘
五分上(五分九厘迄)	貳錢
六分上(七分九厘迄)	參錢
八分上(九分九厘迄)	四錢乃至五錢
一寸上(一寸一分九厘迄)	六錢五厘乃至七錢
一寸二分上(一寸三分九厘迄)	拾錢

是以上の直徑になると、需用が極めて少ない。又短いもの色の淡いものは價が安く、凡そ六分相場となる。

筍の相場は一貫目拾參錢内外、簳相場は乾燥せしめた所謂仕上品一貫目が貳參拾錢乃至六七拾錢である。

植込本數は前に之れを述べたが、成林後の疎密度は普通一反歩苦竹淡竹は九百本乃至千二百本、孟宗竹は竹材を目的とするときは苦竹淡竹と略等しく、筍を目的とせば百二十本乃至百五十本、黒竹は千八百本乃至三千本である。而して成林の遲速は植込本數、土地の瘠肥、其他の關係にも依るが、新植後三年乃至七八年を要する。

次に經營費用に就て概説しやう。先づ第一に地拵であるが、地上に存在せる立木雜草等を除去するのは、樹林の地拵と同業であつて、定着物の如何に依つて自ら大差がある。開墾費に至ては、京都府下では一坪參錢乃至貳拾錢を費して居る。再昨年に於ける母竹代は、堀取共一本に付黒竹拾貳錢、苦竹拾貳參錢、淡竹は自然枯の爲めに著しく騰貴して貳拾錢

迄であつた。孟宗の母竹は賣買したものはなかつたが、堀取費のみに拾錢を要したと云ふ。植栽は一人功程(給水支柱を含む)三十株乃至五十株である。土入は一人功程七十荷乃至百荷で、一反歩十人内外を要する。敷藁又は敷草代は一反歩約拾圓、肥料代は參圓以上、甚だしさは貳拾圓位も投ずるものもある、極端に多額の施肥をなすのは決して得策ではない、先づ參圓乃至拾圓位が適當であらふ。而して施肥人夫功程二人、除草一人乃至二人等である。

此くの如くにして其の收穫は、平均苦竹淡竹林は毎年竹材五六駄筍十貫内外、苦竹の竹十貫乃至十五貫、淡竹の籜五貫内外、孟宗竹林では竹材目的なれば毎年平均八九駄籜五貫等で、筍目的なれば四五百貫が普通である。黒竹林は連年に前年發生のもの全部を伐採し、成林本數と同樣の材數を得られる。

次に余が近頃調査したる、面積二十町歩に對し毎年五町歩づゝ、初年には孟宗竹を、二年三年には苦竹又は淡竹を、四年には黒竹を植栽するものとして收支を計算したものがあるから、參考の爲めに之れを示すことゝする。

竹林造成費年別内譯表(二十町歩)

年次	初年	二年	三年	四年	計
地拵費	一、三〇〇円	一、三〇〇円	一、三〇〇円	一、三〇〇円	五、二〇〇
新植費	二四	四〇	四〇	八〇	一八四
人夫 土入整理施肥費	一	六〇	一二〇	一八〇	三六〇
除草費	一	一五	三〇	四五	九〇

賃	境界堤設置及藩籬造成費	九四	九四	三七六
小	計	一、四一八	一、五〇九	一、五八四
母	竹代	二六	三六〇	三六〇
支	柱代	四	九〇	九〇
肥	料代	一五〇	三〇〇	四五〇
保	護費	三〇	三〇	三〇
雜	費	二五	二五	二五
計		一、八九三	二、三一四	二、五二九

九四	九四	三七六
一、六九九	六、二一〇	
七二〇	一、六五六	
一八〇	四一四	
六〇〇	一、五〇〇	
三〇	一一〇	
二五	一〇〇	
三、二五四	一〇、〇〇〇	

説明

金五千貳百圓　地拵費(開墾費)

但一反歩に付六十五人計一萬三千人一人に付金四拾錢

金百八拾四圓　植込費(施肥及支柱設備共)

但四百六十人一人平均三十本一人に付金四拾錢

金參百六拾圓　土入整理施肥費

但新植の翌年より通計面積三十町歩一反歩三人計九百人一人に付

金四拾錢

金九拾圓　除草費

但新植の翌年より通計面積三十町歩一反歩一人計三百人一人に付

金參拾錢

金參百七拾六圓　境界堤設置及藩籬造成費

但延長九百四十間一間に付一人計九百四人一人に付金四拾錢

金千六百五拾六圓　母竹代(運搬費共)

但苦竹五町歩一反歩五十本計二千五百本淡竹仝上孟宗竹五町歩一反歩三十本計千五百本黒竹五町歩一反歩百本計五千本計新植一萬千五百本補植二千三百本合計一萬三千八百本一本に付金拾貳錢

金四百拾四圓　支柱代(附縄代共)

但一萬三千八百組一組に付金參錢

金千五百圓　肥料代

但毎年一反歩參圓面積通計五十町歩

金百貳拾圓　保護費

但四ヶ年分

金百圓　雜費

合計　金壹萬圓

五年以後は毎年左の經費を要す

六百圓　肥料代

但面積二十町歩一反歩金參圓

貳百四拾圓　土入整理施肥費

但面積仝上一反歩三人計六百人一人金四拾錢

五拾圓　雜費

計金八百九拾圓

而して成林の曉には苦竹淡竹は一反歩約千二百本黒竹は約千八百本孟宗竹は約六百本を存在せしむるものとし苦竹淡竹黒竹は竹材を孟宗竹は筍を主目的とす其の收入は京都府下の例に依るに

種別	收入	平均	概價

苦竹	一五円―二五円	二〇円〇〇〇	束 六七拾錢
淡竹	二―一五	一三、五〇〇	仝 四五拾錢
黒竹	三〇―五〇	四〇、〇〇〇	仝 壹圓弐拾錢
孟宗竹	四〇―五〇	四五、〇〇〇	貫 拾貳錢
平均	―	二九、六二五	

なるを以て之れを最も少く見積り一反歩平均貳拾圓として

粗收入年額　四千圓

となる但し此收入には雜產物即枝條籜等の代金を包含せざるも平均主產物收入の二分即一反歩四拾錢を得べく此金額は

雜產物收入年額　八拾圓となる

五十年間收支概算表

年次	年度	支出	仝上元利	收入	仝上元利	差引純益(不足)
一	四四	一、八九三円〇〇	一、九八七円六五			
二	四五	二、三二四、〇〇	四、五一六、七三	一、〇二〇円〇〇		(一六円六一六、一八)
三	四六	二、五三九、〇〇	七、四〇八、五二			
四	四七	三、二五四、〇〇	一一、一九五、六五			
五	四八	八九〇、〇〇	一二、六八九、九三	三、一二円〇〇		(一六、三四一、四九)
六	四九	八九〇、〇〇	一四、二五八、九二			
七	五〇	八九〇、〇〇	一五、九〇六、三七			
八	五一	八九〇、〇〇	一七、六三六、一八	一、〇二〇円〇〇		
九	五二	八九〇、〇〇	一九、四五二、四九	二、〇四〇、〇〇		
一〇	五三	八九〇、〇〇	二一、三九九、六二	三、〇六〇、〇〇	六、三六、五五	(一五、〇三五、〇七)

一一	五四	八九〇、〇〇	二三、三六二、一〇	四、〇八〇、〇〇	一〇、七三二、八八	（一二、六三九、二二）
一二	五五	八九〇、〇〇	二五、四六四、七一	四、〇八〇、〇〇	一五、三三九、〇二	（一〇、一二五、六九）
一三	五六	八九〇、〇〇	二七、六七二、四四	四、〇八〇、〇〇	二〇、一八五、九七	（七、四八六、四七）
一四	五七	八九〇、〇〇	二九、九九〇、五六	四、〇八〇、〇〇	二五、九九五、二七	（三、九九五、二九）
一五	五八	八九〇、〇〇	三一、四二四、五九	四、〇八〇、〇〇	三一、三七五、〇二	（一、〇四九、五六）
一六	五九	八九〇、〇〇	三四、九八〇、三二	四、〇八〇、〇〇	三七、〇二三、七八	二、〇四三、四六
一七	六〇	八九〇、〇〇	三七、六六三、八四	四、〇八〇、〇〇	四二、九五四、九七	五、二九一、一三
一八	六一	八九〇、〇〇	四〇、四八一、五三	四、〇八〇、〇〇	四九、一八二、七二	八、七〇一、一九
一九	六二	八九〇、〇〇	四三、四四〇、一一	四、〇八〇、〇〇	五五、七二一、八六	一二、二八一、七五
二〇	六三	八九〇、〇〇	四六、五四六、六一	四、〇八〇、〇〇	六二、五八七、九五	一六、〇四一、三四
二一	六四	八九〇、〇〇	四九、八〇八、四四	四、〇八〇、〇〇	六九、七九七、三五	一九、九八八、九一
二二	六五	八九〇、〇〇	五三、二三三、三六	四、〇八〇、〇〇	七七、三六七、二二	二四、一三三、八六
二三	六六	八九〇、〇〇	五六、八二九、五二	四、〇八〇、〇〇	八五、三一五、五八	二八、四八六、〇五
二四	六七	八九〇、〇〇	六〇、六〇五、五一	四、〇八〇、〇〇	九三、六六一、三六	三三、〇五五、八五
二五	六八	八九〇、〇〇	六四、五七〇、二八	四、〇八〇、〇〇	一〇二、四二四、四三	三七、八五四、二五
二六	六九	八九〇、〇〇	六八、七三三、三〇	四、〇八〇、〇〇	一一一、六二五、六五	四二、八九二、三五
二七	七〇	八九〇、〇〇	七三、一〇四、四六	四、〇八〇、〇〇	一二一、二八六、九三	四八、一八一、四七
二八	七一	八九〇、〇〇	七七、六九四、一九	四、〇八〇、〇〇	一三一、四三一、二八	五三、七三七、〇九
二九	七二	八九〇、〇〇	八二、五二三、四〇	四、〇八〇、〇〇	一四二、〇八二、八四	五九、五六九、四四
三〇	七三	八九〇、〇〇	八七、五七三、五六	四、〇八〇、〇〇	一五三、二六六、九八	六五、六九三、四二
三一	七四	八九〇、〇〇	九二、八八六、七四	四、〇八〇、〇〇	一六五、〇一〇、三三	七二、一二三、五九
三二	七五	八九〇、〇〇	九八、四六五、五八	四、〇八〇、〇〇	一七七、三四〇、八五	七八、八七五、二七
三三	七六	八九〇、〇〇	一〇四、三三三、三六	四、〇八〇、〇〇	一九〇、二八七、八九	八五、九六四、五三
三四	七七	八九〇、〇〇	一一〇、四七四、〇三	四、〇八〇、〇〇	二〇三、八八二、二八	九三、四〇八、二五

三五	七八	八九〇、〇〇	一一六、九三一、一三	四、〇八〇、〇〇	二一八、一五六、三九	一〇一、三三四、一六
三六	七九	八九〇、〇〇	一二三、七二三、三四	四、〇八〇、〇〇	二三三、一四四、二一	一〇九、四三〇、八七
三七	八〇	八九〇、〇〇	一三〇、八三三、五一	四、〇八〇、〇〇	二四八、八八一、四二	一一八、〇四七、九一
三八	八一	八九〇、〇〇	一三八、三〇九、六八	四、〇八〇、〇〇	二六五、四〇五、四九	一二七、〇九五、八一
三九	八二	八九〇、〇〇	一四六、一五九、六七	四、〇八〇、〇〇	二八二、七五五、七六	一三六、五九六、〇九
四〇	八三	八九〇、〇〇	一五四、四〇二、一五	四、〇八〇、〇〇	三〇〇、九七三、五五	一四六、五七一、四〇
四一	八四	八九〇、〇〇	一六三、〇五六、七六	四、〇八〇、〇〇	三二〇、一〇二、二三	一五七、〇四五、四七
四二	八五	八九〇、〇〇	一七二、一四四、一〇	四、〇八〇、〇〇	三四〇、一八七、三四	一六八、〇四三、二四
四三	八六	八九〇、〇〇	一八一、六八五、八〇	四、〇八〇、〇〇	三六一、二七六、七一	一七九、五九〇、九一
四四	八七	八九〇、〇〇	一九一、七〇四、五九	四、〇八〇、〇〇	三八三、四二〇、五五	一九一、七一五、九六
四五	八八	八九〇、〇〇	二〇二、二三四、三二	四、〇八〇、〇〇	四〇六、六七一、五八	二〇四、四四七、二六
四六	八九	八九〇、〇〇	二一三、二七〇、〇四	四、〇八〇、〇〇	四三二、〇八五、一六	二一七、八一五、一三
四七	九〇	八九〇、〇〇	二二四、八六八、〇四	四、〇八〇、〇〇	四五六、七一九、四二	二三一、八五一、三八
四八	九一	八九〇、〇〇	二三七、〇四五、九四	四、〇八〇、〇〇	四八三、六三五、三九	二四六、五八九、四五
四九	九二	八九〇、〇〇	二四九、八三二、七四	四、〇八〇、〇〇	五一一、八九七、一六	二六二、〇六四、四二
五〇	九三	八九〇、〇〇	二六三、二五八、八七	四、〇八〇、〇〇	五四一、五七二、〇二	二七八、三一三、一五
計		五一、七九四、〇〇				一六九、三二〇、〇〇

備考　一、利率は年五朱とす

第四　餘錄

京都府地方に於ける、筍鑵詰製造法を畧述しやう。原料は決して品質優等のものを用いぬ、俗にバイネと稱へる最初に發生した基部肥大にして短いものか、又は矮小のものを撰ぶ。鑵詰一個に用ゆる原料は、三磅入では長二三寸のもの四百目、六磅入では長さ四五寸のもの一貫二百目を

要する。而して製造法は先づ第一に竹皮を剝離するのであるが、是は生のまゝ剝ぐのが普通であるも手數を省く爲め煮沸して後に行ふこともある、然し此の方法は色を損するから、決して良法ではない。此くして剝皮したものを釜に入れ、煮沸すること三十分間、然る後取り出して之れを新鮮なる冷水に浸漬すること三十分内外、泡の出ぬ樣に成つた後筍の基部を去り、鑵に詰め蓋を被ひ、封蠟を以て密閉する。其の密閉したものを沸騰せる釜中に入れて煮ること約一時間の後、取出して鋭利なる錐の如きもので穴を穿ち、鑵内の空氣を去つて密閉し、再び冷水に漬すのである。而して六磅入では、此の方法を反覆二回行はねばならぬ。

歐米には嘗て筍を產せぬ爲めに、歐米人は日本で筍を食料とするのを見て、日本人は竹の如きものまで食ふて居るとて嗤笑したと云ふ話が傳へられて居る。從て筍は歐米人などの口にせぬものの樣に信じて居るものもあるが、夫れは間違ひである。筍にも相當滋養分を含み、蔬菜として優等のものであることは左の分析表が之れを証明して居る。

	水分	蛋白質物	脂油	炭水化物	纖維	灰分
孟宗竹筍	九〇、二一	三、二八	〇、二三	四、四九	〇、九〇	一、〇一
苦竹筍	九一、七九	二、五九	〇、一一	三、三一	一、一〇	一、一〇
茄子	九四、〇〇	一、〇〇	〇、〇六	三、一一	一、四一	〇、四二

今より凡そ二十年前頃までは京都府下の黑竹林は乙訓郡新神足村に、傘の柄に供するものが僅かに一反歩許りあつたのみであつたが、海外輸出の途開くるに及び漸次增殖して今日の發達を致したのである。當時茶業不振の爲めに、茶園を黑竹林に改めたものが夥しい。素より黑竹林業は、

主として海外輸出を目的とするのであるから、年々輸出額の増減を免れぬと共に連年の收入は不均一である。前にも述ぶる如く、黒竹林は連年作業法に依り、満二年以上の古竹を殘さぬ、即ち輸出材は新竹に限る爲めに、年に依りては損失することもあるが、概して他の竹林よりは利益が遙かに多い。殊に近年は頗る好況で、數年前の如きは一反歩七八拾圓の純益を得たものも珍しくなかつたとのことである、然しながら此の好況が長く持續するや否やは分らぬ。要する黒竹林業は他の竹林業と相違して稍投機的の性質を帶びて居るから、事業上の危險を免れぬ。

京都府下から輸出する黒竹は、主として佛國及英國を仕向地として居る、而して品質優等にして價格高きものを巴里向と云ひ、劣惡にして低廉なるものを倫敦向と稱へて居る。一寸奇異に感ぜられるが、竹材商の説明に據ると佛國では直に自國内にて消費し、英國に於ては器具に製造して更に外國へ輸出するから、自然に原料の低廉なるものを需むるのであると云ふ。

黒竹材の優等なるものは、其の名稱の如く飽くまでも黒色でなければならぬ。色の濃淡は光線の關係に依るとの説を唱へるものもあるが、之れを實地に就て視察すると、全く謬論たることが分る。即ち其の色は一は種類に依るので、俗にマグロと稱へるものは、發生した年の九月に至れば全く黒色となる、三年グロと稱へるものは、翌年から黒色とはなるが餘程淡い。又林地の瘠肥にも關係し、肥沃地に於ける太いものは濃くして且つ堅い。夫故黒竹林は努めて密生せしめ、餘り大材たらしめぬ必要がある。

竹林は前に述べた如く、最初は疎植して天然の繁殖を俟つのであるから、初めの内若干年間作を行はゞ土地の硬結を防ぎ、且つ幾何かの利益を得られるから一舉兩得の方法である。間作物としては坪井翁は豆類の栽培を主張せられ、安藤林學士はクロバーもよからふとの説であつた。又竹林内では副業として、養鷄も面白い、一反歩二三百羽は飼養し得らるゝとのことである。養鷄は竹林に對して、別段に害を及ぼさぬのみならず却つて害虫を驅除し、且つ土地を肥沃ならしむるに有効である。

安藤林學士は「竹林業いろは盡し」を撰まれて居るが、頗る面白いから左に之れを掲ぐる。

竹林業いろは盡し

い、一日も早く竹林を手入するがよし

ろ、論より証據京都地方の栽培的竹林を視察するがよし

は、排水に注意するがよし

に、西南の國程竹林を大切に栽培するがよし

ほ、細き竹は貿易向又は釣竿用に供給するがよし

へ、隔りを程能く保たしむるがよし

と、土地は山麓堤防家屋附近を撰ぶがよし

ち、塵埃は肥料として施すがよし

り、隣接地に竹根の蔓延するを防ぐがよし

ぬ、抜き伐りは連年又は隔年適度にするがよし

る、類を撰び利用の目的に適はしむるがよし

を、落葉は林地に堆積するがよし

わ、若き竹は伐採せぬがよし
か、垣根は丈夫にし正しく修繕するがよし
よ、夜盗虫を驅除するがよし
た、竹の栽培は一番集約的で收穫も早くてよし
れ、連年作業は伐り過さぬがよし
そ、側方に林衣を設け風と日光とを防ぐがよし
つ、土を度々林地に布くがよし
ね、年々發生年號を竹幹に書付けるがよし
な、苗竹は蘚根の健全で親竹の良いものを撰ぶがよし
ら、亂伐は發育を害する故避くるがよし
む、無暗に肥料を施さぬがよし

う、植付は晩秋又は晩春になすがよし
ゐ、猪の筍を食害する處は豫防するがよし
の、鋸は周り八寸以上の竹を伐るに用ふるがよし
お、多く密生さゝぬがよし
く、草取りは年々怠らぬがよし
や、山に竹の繁殖を放任せぬがよし
ま、苦竹、眞竹は竹林として一番儲けがよし
け、堅固な竹材は四五年生のものがよし
ふ、風害に尤も注意するがよし
こ、小竹には黒竹を培養するがよし
え、枝は薪にするか垣根にするの外種々の利用をなすがよし
て、天然竹林の伐採を濫にせぬがよし

あ、雨降り後は筍の發生がよし

さ、酒樽の箍に用ふる地方は太く育てるがよし

き、伐り口は早く腐らすため鉈にて割るがよし

ゆ、雪多き地方は鍍卷法を施すがよし

め、女竹は野生のものを利用するがよし

み、南向の土地は竹の繁殖が尤もよし

し、自然枯の救濟法を早く行ふがよし

ひ、等しい太さの竹に揃ふ樣仕立つるがよし

も、目前の利益を見て皆伐せぬがよし

せ、節間距離の長く節の低い竹を作るがよし

す、水害害地方には竹林を堤塘又は流域に培養するがよし

竹林業講話終

復製不許

大正元年八月二十五日印刷
大正元年八月三十日發行

定價金拾錢

著者　藤原康雄　三重縣津市西堀端二十五番屋敷寄留

發行兼印刷者　小寺庄三郎　三重縣津市榮町三十六番屋敷

印刷所　小寺活版所

94
483

94
783

終